

## 年 表

明治10年(1877). 4月 東京大学設立.

5月頃 在京の数学者達が相会し, '数学の開進を計る'ことを協議.

9月 東京数学会社創立. 総代(後に社長と改称)神田孝平, 柳楢悦; 編輯 大村一秀(題言別掲).

10月 以後毎月第一土曜日に湯島昌平館に集合して定会開催. 第1回としてドイツ人ドクトル・シェンデル(名簿にはセンデルとある)の講演(2回にわたる).

11月 東京数学会社雑誌第1号発行. 和紙組木版, 菊版半載, 14葉(28ページ). 以後毎月発行.

主として'社員'からの設問と解答を掲載. 巻末に社員希望者114名の名簿あり.

12月 社則(6ヶ条; 別掲)を定める. 常員は入社金1円, 毎月20銭の会費を納めることとなった. 常員となったもの55名.

明治11年(1878). 3月 柳楢悦洋行のため, 岡本則録(神田孝平とともに)社長となる.

6月 岡本則録最初の総理(雑誌編輯責任者)となる. 以後総理は毎号交代している. この頃雑誌は二十数葉となる.

9月 東京数学会社雑誌第9号より活版刷となる.

11月 以後例会で毎回講義を行う.

明治12年(1879). 10月 この頃会の不振を挽回するため, 委員を設けて雑誌の編輯を行い, また書記生を置いて, 雑誌の郵送, 会費収納事務を行わせる. この頃会員66名.

11月 委員12名を選挙で決定. 以後委員や有志が定期的に日本橋区呉服町'柳屋'に会合して雑誌発行について協議, また会則を8ヶ条に増補(雑誌20号に掲載).

12月 東大理, 物理学科の学生が中心になり, ニュートン祭(12月25日頃)が始まる.

明治13年(1880). 3月 神田孝平, 社長を辞任.

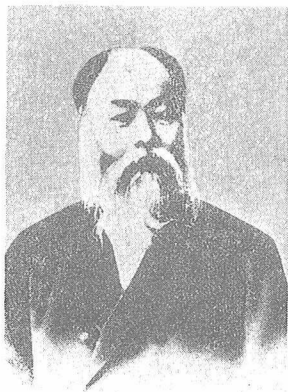
4月 柳楢悦, 社長.

選挙により, 川北朝鄰, 岡本則録を事務委員に選出. 後に伊藤直温を委員補欠に追加.

4月 以後1年半ほど, 例会は京橋区日吉町, 共存同衆館で開かれる.

5月 社則を改訂, 23ヶ条に増補(別掲). ただし会誌には7ヶ条の要約が掲載.

入社には社員1名以上の保証あるものについて



神田孝平

委員の協議によって許可, 入社金1円. また毎月雑誌を発行して社員に配達することや, 学術委員, 事務委員を設けることなどが定められた.

7月 社則の規定にある学務委員を定めた. 最初の委員は下記のとおり.

算術・代数学: 山本信実, 川北朝鄰

幾何・三角法: 中川将行, 荒川重平, 伊藤直温

球面三角法・星学・航海学: 磯野健, 肝付兼行

代 微 積: 岡本則録, 赤松則良

三軸法・重学: 菊地大麓

本 朝 数 理: 大村一秀, 福田理軒, 川北朝鄰

(測器類の試験: 磯野健, 肝付兼行)

8月 訳語会会則を定める.

9月 以後毎月共存同衆館で訳語会を開催. 9月の第1回の訳語会で, 下記の訳語を議定: Quantity 数量, Number 数, Abstract Number 不名数, Concrete Number 名数; Unit の訳語は'紛々決せず'.

明治14年(1881). 前年12月~3月. 訳語会において多数の訳語が決定; 精しくは数学会刊行物記事参照.

5月 東京数学会社雑誌第36号より菊版西洋紙, 縦二段組となる.

9月 以後例会を帝国大学(東京大学)で開催. この頃会の仮事務所は麴町区富士見町2丁目29番地にあった.

12月 雑誌42号付録に多数の訳語と決定にいたる討論を掲載, Algebraの訳語に'点窟'がしりぞけられ, '代数学'と決定.

明治15年(1882). 2月 雑誌44号付録に訳語の追加. 数学, 算術, 単位などの訳語がようやく決定.

5月 菊池大麓, 社長廃止を提案. (2,3ヶ月でまた復活).

8月 柳楢悦退社.

明治16年(1883).

6月山川健次郎の発議により, 物理訳語会発足.

明治17年(1884).

5月菊池大麓の動議により, 物理学・星学を攻究する者も含めて社を拡張し, 東京数学物理学会とすることを討議.

6月 東京数学物理学会に改組. 東京数学会社雑誌は第67



柳楢悦

号をもって廃刊. 東京数学物理学会記事を出版することを決定.

以後毎月(5月, 8月を除く)第一土曜日に常会, 5月第一土曜日に年会を開催することに定められた. 入会金1円, 会費月20銭. 委員長選挙を行なう. 最高得票の菊池大麓は洋行予定のため辞任し, 次点の村岡範為馳が初代委員長となる.

7月5日に帝国大学で第1回常会開催. 会員総数82名.

山川健次郎ら関賞牌を動議.

9月 関賞牌規則設定. 資金は有志の寄附により, 賞牌の地金は金9銅1のものと定められた. 趣旨は'関賞牌ハ関先生ノ芳名ヲ不朽ニ伝ヘ且数学ノ進歩ヲ奨励スル

東京数學會社雜誌題言

此般數學會社ヲ開立スルノ目的ハ益々斯學ヲシテ開進セシメン  
トヲ欲スルニ在リ此學ヲ開進セシメントヲ欲スルノ目的ハ實理  
ヲシテ大ニ人間ニ明ナラシムルニ在リ蓋シ數ハ理ノ證ナリ證明  
ナラザレハ理顯レス荷理ノ顯レントヲ求メバ數ソレ講明セザル  
可ケンヤ我邦數學ヲ講スル者古來其人ニ乏シカラズ近世西學開  
クルニ及テ數學モ亦大ニ進ミ二三傑出ノ名家アリテ出テ東西ノ  
美ヲ併セ大ニ斯學ノ面目ヲ一新セリト云願フニ昔時武治ノ世士  
人ト稱スル者専ラ體力ヲ重ンジ智力ヲ重ンセズ儒者佛者皆空理  
ヲ務メテ實用ヲ務メズ等數ノ事ニ至テハ之ヲ卑シムト特ニ甚シ  
ク視テ以テ商賈ノ事トシ之ヲ度外ニ措クニ至レリ方今其風漸ク  
除ケリト雖モ餘習未ダ盡ク去ラズ常人ハ論ナキノミ文武ノ職ニ  
居リ教導ノ任ニ當リ號シテ君子學士ト稱スル者ト雖モ往々數學  
ヲ講セズ唯ニ講セザルノミナラズ講セザルヲ以テ辱トナサハル  
ニ至ル是數明ナラザレバ理顯レザルトヲ知ラザルヲ以テナリ然  
ラバ則チ斯學ノ面目ヲ一新セリト云フ者モ唯其專門有志輩ノ間  
ニ止マリテ其效未ダ公衆一般ノ實益ヲ爲スニ及バズト云フベシ  
是此會ヲ設ケタル所以ナリ本會既ニ公衆一般數學ノ開進ヲ以テ  
目的トス乃亦此目的ヲ達スベキ方略ヲ撰バザル可ラズ是ニ於テ  
會同初議略其端緒ヲ開キ要スルニ力ノ及ブ所ヲ盡サントヲ欲ス  
ルニ在リ其目曰ク内外古今數學關係ノ書籍ヲ蒐輯スルナリ曰ク  
各人ノ質問ヲ受ケバ必ズ之ガ答ヲ爲ス可キ也曰ク會中不審ノ件  
ハ弘ク公衆ニ質問ス可キナリ曰ク西洋數學書ヲ翻譯ス可キナリ  
曰ク既ニ翻譯セル者ハ之ヲ印行ス可キナリ曰ク諸名義譯例等ヲ  
一定ス可キナリ曰ク毎會議定スル所ハ輯録シテ印行ス可キナリ  
此等其大略ニシテ細目ノ如キニ至リテハ逐會議定スル所アラン  
トス今議事輯録第一號稿成ル題シテ東京數學會社雜誌ト云フ將  
ニ副題ニ附セントス依テ聊立會ノ本志ヲ述ルコトカクノ如シ

明治十年十月

神田孝平識

東京數學會社雜誌第一号より

社 則

- 第一條 本社會員ヲ分ツテ常員及ヒ臨時員ノ二種トス
  - 第二條 本社ノ常員ト爲ラントヲ欲スル者ハ入社ノ時ニ金一圓ヲ納ムルトヲ要ス
  - 第三條 但シ臨時員ハ納金ヲ要セズ
  - 第四條 遠國ニ在リテ通信員トナル者ハ常員ノ例ニ同ジ
  - 第五條 常員ハ出席ノ有無ニ拘ラズ每會社費トシテ金二十錢ヲ納ムルトヲ要ス
  - 第六條 臨時員ハ出席アリシ時ニ限り社費金二十錢ヲ納ムルトヲ要ス
  - 第七條 雜誌ハ每號出來ノ節常員一般及ヒ當日出席ノ臨時員ヘ一部  
ヅ、配付スベシ
- 但シ通信員ハ別ニ郵便費ヲ納ムルトヲ要ス
- 右ハ昨明治十年十二月會日ニ於テ議定シタルモノニシテ此後逐會議定スル所ハ悉ク雜誌ニ掲載スルヲ例トス若シ入社人ニシテ未ダ此規則ヲ知ラザル者ハ本文ノ納金等次會ニ指出スベシ

社長

明治十年十二月に定められた最初の社則で、上記雜誌第三号に掲載されている。

タメ数学上功績アル本邦人ニ授与スル者トス'

明治 18 年(1885). 2 月 東京数学物理学会記事第 1 卷刊行. 四六版縦組. 編輯者: 山川健次郎, 寺尾寿, 川北朝輝, 荒川重平, 村岡範為, 菊地敏吉郎, 発兌書肆: 丸屋善七(現在の丸善), 土屋忠兵衛とある.

数学会社雑誌が問題と解答中心であったのに対して, 事務記録のほか, 解説記事や国際会議の報告が中心になった.

7 月 隈本有尚, 北尾次郎の動議により, 反対意見もあったが, 会の記事はローマ字綴で記されることになる.

明治 19 年(1886). 9 月 東京数学物理学会記事第 3 卷を TÖKYŌ SŪGAKU BUTURIGAKU KWAI KIJJI という表題のもとに発行する. ただし表題のローマ字綴りは, この後しばしば変更されている.

以後横組み, 会務の記事はローマ字書き, 学術的論文は英文またはローマ字書き日本語となる.

明治 20 年(1887). 6 月 入会金 1 円, 会費年 2 円と定める. 会員数 94 名.

記事は第 4 卷第 1 号から菊版となり, 外国の文献の翻訳紹介も掲載されるようになる. 下記の論文の英訳が掲載され, 1891 年に Memoirs on Infinite Series という題の下に単行本として発行された.

原著者	原雑誌	原語	訳者
Dirichlet	Crelle's J. 17	フランス語	藤沢利喜太郎
Abel	Crelle's J. 1	フランス語	三輪桓一郎
Gauss	全集 3 卷	ラテン語	菊池大麓
Kummer	Crelle's J. 15	ドイツ語	長岡半太郎

明治 21 年(1888). 5 月 富士見町富士見軒にて年会開催(東京大学以外での最初). 記録の末尾に '右畢テ別席ニ於テ宴會ヲ開キ一同歎フ尽シテ散會ス' とある.

この年現在アメリカ数学会の前身 New York Mathematical Association が会員 16 名で発足.

東京数學會社々則

- 第一條 本社ハ數學測量天文ノ學術ヲ研究鍊磨シ數理ノ開進ヲ以テ専務トス
- 第二條 本社々員ヲ分ツテ常員通信員客員ノ三種トス
- 第三條 常員ハ會場ニ出席スル者通信員ハ遠國ニ在テ社則ヲ遵守スル者客員ハ數理有名家ニシテ社員協議ノ上社員ニ聘スル者
- 第四條 社員一名以上ノ保證アル者ハ委員協議ノ上入社ヲ許シ社員券ヲ交付ス
- 第五條 但社員券ヲ交付スルハ入社金一圓ヲ納ムベシ
- 第六條 但止ムヲ得ザル事故アリテ會日會場ヲ變改スルハ常員一般ヘ告知スベシ
- 第七條 社員ハ毎月定費トシテ一圓ヨリ多カラズ貳拾錢ヨリ少ナカラザルノ金ヲ納ムルヲ要ス
- 第八條 集會日ヲ以テ納金ノ定日トス故ニ必ズ出席ノ有無ニ拘ラズ會場ニ差出シ受領證ヲ得テ納金シタル確證トスベシ
- 第九條 但都合ニ寄リ一時ニ數ヶ月分納ルモ妨ゲナシト雖モ不納三ヶ月ニ到レバ端書郵便ヲ以テ之ヲ催促スベシ
- 第十條 但數ヶ月分ノ定費金ヲ六月十二月兩度ニ遞送スベシ
- 第十一條 但數ヶ月分一時ニ遞送スルモ妨ゲナシト雖モ必ズ前納タルベシ
- 第十二條 論廣ク世間ノ質問ニ應ジ之ガ答辨ヲ爲スベシ質問ノ事項通常ナルモノハ學務委員之ヲ擔當シ六十日ヲ限リ之ヲ答辨ナシ其事項高尚ナル者ハ普ク社員ニ通知シ其答ヲ募リ九十日間ヲ限リ質義者ニ答フ可シ其理深遠ニシテ解シ難キ者ハ廣ク字内ノ數理大家ニ解義ヲ請フテ質義者ニ答フルトアルベシ
- 第十三條 新發明ノ測器類及ビ其他ノ器械ヲ試驗シ其利害得失ヲ辨明スル等ノトモ又前條ニ比準スベシ
- 第十四條 公中中小學校ニ於テ數學教員撰擧ノ時其試驗ヲ本社ニ請フハ委員協議ノ上之ヲ辨スベシ
- 第十五條 數學教員測量者等ノ雇入試験ヲ本社ニ請フハ委員協議ノ上之ヲ辨スベシ
- 第十六條 毎月雜誌一號ヲ發兌シ社員一般ニ配達スベシ
- 第十七條 圖書金圓其他ノ物品ヲ社員若シクハ社外ヨリ寄附スル時ハ事務委員受領シ社長ニ告ゲ永ク社中ニ保存スベシ
- 第十八條 但新著譯ノ圖書寄附ニ係ルモノハ必ズ雜誌ニ掲ゲ廣ク江湖ニ報告スベシ
- 第十九條 凡ソ寄附ニ係ル圖書其他ノ物品等毎年兩報告表ヲ作りテ社員一般ニ報告スベシ
- 第二十條 社長一名 學務委員十二名 事務委員貳名 書記一名ヲ置ク事
- 第二十一條 社長ハ本社一切ノ事務ヲ總理シ委員以下ヲ誘導シ盡力其當ヲ得セシメ本社興廢存亡ヲ以テ自任ス
- 第二十二條 學務委員ハ學術上ニ係ル事業ヲ負擔シ研究討論以テ數理進歩ノ道ヲ講ジ併テ雜誌編輯ヲ自任ス
- 第二十三條 事務委員ハ社長ヲ輔ケテ社中一切ノ事務會計ヲ整理負擔シ兼テ金圓物品ノ出納報告表ヲ調製スルヲ自任ス
- 第二十四條 書記ハ社員社外ヲ論セズ委員ノ協議ニ因テ社長ニ中稟シ雇入ル者トス本社一切ノ雜務ハ事務委員ノ指揮ヲ得テ擔當スル者トス
- 第二十五條 社長學務委員事務委員ハ滿一ヶ年ヲ以テ任期トシ毎年六月投票ヲ以テ公撰スベシ
- 第二十六條 新撰ノ社長委員ハ撰擧ノ月ヨリ二ヶ月間ノ内ニ社則ヲ改正シテ社員ニ廣告スルノ權ヲ有スベシ
- 第二十七條 每年六月ヲ以テ紀年會ヲ開キ前年度ノ事業會計其他重要ノ事件ヲ社員ニ報告スベシ
- 第二十八條 右ノ條件社員タル者遵守ス可キ也

明治 22 年(1889). 10 月 沢田吾一に関賞牌授賞. この授賞はこの 1 回のみであった.

明治 24 年(1891). 1 月 創立者の一人柳樽悦(1832—1891 1/10)歿.

5 月 委員長, 東京天文台長寺尾寿の世話で, 東京天文台(麻布区飯倉)にて年会を開催. 10 日会員一同水星日面経過を観測.

明治 25 年(1892). 記事第 5 巻を発行. 巻頭に Kronecker(1823. 12/7—1891. 12/20)の写真を掲げ, 藤沢利喜太郎による追悼文を掲載.

また G. B. Halsted (Texas 大学)の英訳した Lobatschewski, J. Bolyai の非ユークリッド幾何学の論文が, 菊池大麓の尽力により転載された.

明治 27 年(1894). 7 月 菊池大麓: '円の積を見出す和算の方法'の講演が常会で行われる. この頃から講演会の活版刷による案内が保存されている.

明治 29 年(1896). 前年秋に行われた W. K. Röntgen の X 線の発見の報に基づき, 山川健次郎, 村岡範為馳, 島津源蔵ら X 線の実験に成功.

7 月 記事第 7 巻に W. K. Clifford の英訳による Riemann の '幾何学の基礎をなす仮説について'を転載.

また日本の算家譜略が掲載, 川北朝鄰による関流宗統修業免状の全文を寄せる.

この年から 1900 年の第 5 冊まで藤沢利喜太郎教授セミナー演習録を出版.  $e$  と  $\pi$  の超越性の証明の紹介などがある.

明治 30 年(1897). 京都帝国大学設立.

明治 31 年(1898). 創立者の一人, 神田孝平(1830—1898)歿.

明治 32 年(1899). 5 月 英国ケンブリッジ大学 Stokes 教授開講 50 年の祝賀式に, 委員長長田中館愛橘の名で祝賀状を送る.

明治 33 年(1900). 8 月 パリで第 2 回万国数学会議開催. Hilbert の講演: '数学の問題'の藤沢利喜太郎による紹介あり.

また第 1 回国際物理学会議に長岡半太郎が招待され, 磁歪について講演.

12 月 この頃 '記事'の発行が不規則となる. 1896 年 5 月から 1900 年 2 月までの記事が, 漸くこの年発行の第 8 巻の 6 冊にわたって掲載された.

明治 34 年(1901). 6 月 Tokyo Sugaku Buturigakwai Hōkoku という表題の雑誌を毎月刊行. 事務概要や講演概要を主として日本文によって掲載.

明治 35 年(1902). 11 月 関孝和 200 年祭執行方法を議す.

明治 36 年(1903). 12 月 上記の雑誌の表題中 Hōkoku を第 2 巻第 7 号から Kiji-Gaiyō と改める. 以後事務概要は次第に減って 1 ページぐらいになり, 講演概要は数ページにおよぶようになる.

明治 37 年(1904). ハイデルベルクで行なわれた第 3

回万国数学会議に三輪桓一郎, 中川詮吉出席.

明治 38 年(1905). 3 月 Kiji-Gaiyō 第 2 巻第 20 号から, Proceedings of the Tokyo Physico-Mathematical Society という副題がついた.

明治 40 年(1907). 1 月 雑誌の表題 Kiji-Gaiyō を第 3 巻で廃止, 第 4 巻から Tōkyō Sūgaku-Buturigakwai Kiji, Dai 2 Ki, 副題 Proceedings of the Tōkyō Mathemico-Physical Society, 2nd Series と改題. 8 月を除く月刊, 2 ケ年にわたる 22 冊をもって 1 巻とする. 第 4 巻は 466 ページ, 第 5 巻は 460 ページ. この頃から漸く今日のような学術雑誌としての体裁がととのう.

4 月 関孝和 200 年祭を行う. 川北朝鄰の式辞および遠藤利貞の講演.

また年会の折に学術通俗講演を行い, 数年間続く. その講演集を刊行.

9 月 関流算法七部書を刊行.

12 月 関先生二百年忌記念本朝数学講演会が東京神田区一ツ橋の東京高等商業学校大講堂で行われる(5 日). 菊池大麓ら有志により, 東京牛込区浄輪寺において関孝和贈位奉告祭挙行(6 日).

明治 41 年(1908). 3 月 上記の本朝数学講演会の講演集刊行. 収録講演者は藤沢利喜太郎, 林鶴一, 狩野享吉, 菊池大麓, 川北朝鄰, 遠藤利貞.

この年から委員, 委員長の任期をそれぞれ 2 年, 1 年とする.

明治 42 年(1909). 3 月 Tōkyō SŪGAKU-BUTURI GAKU KWAI KIZI(第 1 期)は 1902 年 8 月刊行の第 9 巻第 1 号以降永らく中絶していた. この月 1901 年 12 月より 1906 年 12 月までの事務, 講演の記録を収めて第 9 巻第 2 号として刊行. これをもって第 1 期(1st Series)の終刊とする.

明治 43 年(1910). 2 月 学会の常会・委員会の記録と別に, 通俗講演会記録を整理.

長岡半太郎, 本多光太郎らの建議により, 東北帝国大学, 九州帝国大学設立.

明治 44 年(1911). 日本における最初の国際的数学専門誌である東北数学雑誌 The Tōhoku Mathematical Journal 創刊.

明治 45 年=大正元年(1912). 8 月 明治天皇崩御につき本会会員一同より奉悼文を呈出. 9 月の常会で報告. ロンドンで開催の第 5 回万国数学会議に, 菊池大麓, 藤沢利喜太郎, 窪田忠彦出席.

大正 3 年(1914). 4 月 これまで会の常会, 委員会の記録は毛筆縦書きであったが, この年の年会から, ペン書き横書きとなる.

大正 4 年(1915). 8 月 雑誌 Kiji 所載の事務記録をローマ字書きにすることを止める.

大正 5 年(1916). 物理学者本多光太郎, '鉄に関する研究'により学士院賞受賞.

大正 6 年(1917). 8 月 菊池大麓(1855. 3/17—1917. 8/

19) 歿。藤沢利喜太郎により英文の追悼文を Kiji に掲載。

大正 7 年(1918)。4 月 会員が多数になり、全国に散在するようになったので、委員長長岡半太郎から会名を日本数学物理学会とすることを提案。

5 月 蘆野敬三郎、平山清次らは‘日本物理学会’と改称することを提議。

9 月 会名変更案が正式に常会上に提され、日本数学物理学会とする案が通過、同会が成立、会員数 439 名。

大正 8 年(1919)。欧文誌 Nippon Sūgaku-Buturigak-kwai Kiji, Dai 3 KI (Proceedings of the Physico-Mathematical Society of Japan, 3rd Series) 創刊。四六倍版(今の B5 版)、8 月を除く月刊、各冊は 10~40 ページ、毎年 1 巻となる。英文の Mathematics と Physics との順序が逆転したのは、口調のため、短いほうが前にくるのが慣例だからという。

大正 9 年(1920)。日本学術研究会議創立。ストラスブルでの万国数学者会議で高木貞治、類体論を発表。また小倉金之助も出席し、講演。

大正 11 年(1922)。3 月 A. Einstein 来日。

大正 12 年(1923)。4 月 年会を数学分野と物理学分野に分けて開催(各 2 日)。

9 月 関東大震災のため 9 月の常会を中止。しかし 10 月以降は毎月東京帝国大学化学教室で開催される。

大正 14 年(1925)。12 月 理科年表創刊。

大正 15 年=昭和元年(1926)。12 月 大正天皇崩御のため、Kiji 第 8 巻第 11 号から 1 年間、表紙を黒枠刷とする。

昭和 2 年(1927)。2 月 規則改正を可決。

9 月 日本文の機関誌日本数学物理学会誌を創刊。主として総合報告や外国の文献紹介を収める。以後欧文誌は研究発表中心、日本文誌は紹介記事・記録中心という方針になる。

昭和 3 年(1928)。4 月 学会創立 50 周年記念大会講演会を東大にて開催。委員長中村清二が創立以来 50 年の歴史について報告(末尾の文献 [4])。

掛谷宗一、‘連立積分方程式およびこれに関連する函数的研究’により学士院恩賜賞受賞。

ボロニアで開催された第 8 回万国数学者会議に、掛谷宗一、末綱恕一、岡田良知、吉田洋一、河口商次、杉村欣次郎ら出席。

昭和 4 年(1929)。7 月 東北帝国大学で年会開催(3 日間)。東京以外の地で年会が開催された最初であり、以後隔年に東京と東京以外での開催が恒例となる。

昭和 5 年(1930)。5 月 常会とは別に委員会を定期的に開催するようになる。北海道帝国大学理学部開設。

昭和 6 年(1931)。6 月 日本数学物理学会誌を年 4 回発行とする。大阪帝国大学設立。

10 月 京都帝国大学で年会開催(3 日間)、東京以外で開催された第 2 回目。

昭和 7 年(1932)。7 月 ‘応用物理’創刊、チャーリヒ

で開かれた万国数学者会議に高木貞治、南雲道夫、三村征雄、彌永昌吉、守屋美賀雄ら出席。高木は第 1 回 Fields 賞委員。

昭和 8 年(1933)。8 月 会誌 8 月号も含めて完全な月刊となる。

12 月 藤沢利喜太郎(1861. 9/9—1933. 12/27)歿。

昭和 10 年(1935)。4 月 大阪帝国大学で年会開催(4 日間)。

昭和 11 年(1936)。オスロの万国数学者会議に、藤原松三郎、国枝元治、下村市郎、田中正夫ら出席。

昭和 12 年(1937)。7 月 北海道帝国大学で年会開催(4 日間、ただし数学関係は 2 会場で 2 日間)。

11 月 文化勲章制定。木村栄、本多光太郎、長岡半太郎第 1 回受章。

昭和 14 年(1939)。功力金次郎、‘抽象空間の研究’により、学士院賞受賞。名古屋帝国大学開設。

昭和 15 年(1940)。11 月 高木貞治、文化勲章受章。

12 月 社団法人に改組の件可決。

昭和 16 年(1941)。2 月 社団法人の組織をとる。

昭和 18 年(1943)。7 月 東北帝国大学で年会開催(3 日間)。敗戦前最後の年会となる。

11 月 湯川秀樹文化勲章受章。

日本数学物理学会会誌は、この年刊行の第 18 巻をもって事実上廃刊となる。

昭和 19 年(1944)。4 月 文部省統計数理研究所設立。初代所長掛谷宗一。

7 月 年会を中止。全国的な大会の開催が不可能になったので、代りに地方支部会や分科会が開催される。山内恭彦主催で応用数学分科会第 1 回が東京帝国大学で開催、以後 3 回まで行われる。

9 月 翌年 6 月まで 4 回京城支部会が開催。

11 月 田中館愛橘、岡部金治郎、文化勲章受章。

大戦のため、欧文誌 Proceedings もこの年発行の第 26 巻第 3/4 号をもって事実上廃刊となる。

昭和 20 年(1945)。3 月頃から各地大学の疎開始まる。

4 月 年会を中止。1 月~3 月は講演申込者皆無や空襲のため常会も中止。

7 月 敗戦前最後の常会開催、講演者増山元三郎。また京都支部会開催(21 日、主として数学分野)。これが敗戦前の最後の公式会合のようである。

9 月 8 日東京大学において戦後最初の常会開催。

10 月 大戦中失われた学会としての機能を復活し、より以上活発にするため、以前から議論があった数学会と物理学会の二学会に分離することが、理事長清水武雄から提案。

11 月 仁科芳雄、文化勲章受章。

12 月 臨時総会において分離が決定。

昭和 21 年(1946)。4 月 日本物理学会設立総会、会員 1812 名。

5 月 日本物理学会の欧文誌 Journal of the Physical

Society of Japan 創刊, 隔月出版.

6月 日本数学会設立総会, 7分科会, 8支部として発足. 会員751名(以後専ら日本数学会関係の事項に限る).

数学会誌最終号刊行, 物理学会会誌創刊(隔月出版).

昭和22年(1947). 4月 日本文の機関誌数学創刊. 以後年1巻季刊. 岩波書店から発行.

5月 東京大学において日本数学会最初の年会開催. 2会場3日間. 全国的大会は春秋2回となる.

数学辞典の編集の企画が本ぎまりとなる.

当用漢字制定にともない学術用語委員会が規格協会などと共同で発足, 約1年ほどで案を提出. 文字の書きかえ(函数→関数, 拋物線→放物線など), 言葉のいいかえ(収斂→収束, 梯形→台形, 楕円→長円など). また当用漢字とは無関係に戦時中から諸分野・諸学派の術語不統一を統一しようという動きを受けつた変更(常数→定数, 定差→差分 など)もあった.

昭和23年(1948). 1月 日本学術会議発足. 増山元三郎, '標本抽出による推計理論の発展と応用'で朝日賞受賞.

9月 欧文誌 Journal of the Mathematical Society of Japan 創刊.

10月 秋季総合分科会を京都大学で開催. 日本数学会となって, 最初の東京以外での全国的大会である(以後の開催地は別掲).

昭和24年(1949). 数学基礎論, 実函数論両分科会が追加され, 全9分科会となる.

正田建次郎, '抽象代数学の研究'により学士院賞受賞.

12月 湯川秀樹ノーベル物理学賞受賞.

昭和25年(1950). 8月 ハーバード大学において1940年に予定されていた万国数学者会議開催. 十数名が出席し, 事実上国際学界への復帰となる. 招待講演者は角谷静夫, 岩沢健吉, 中山正. IMU(国際数学連合)がUNESCOの下部機構として改組され, 日本はグループ4に位置づけられる.

昭和26年(1951). 岡潔, '多変数関数の研究'により学士院賞受賞, 高木貞治文化功労者となる.

昭和27年(1952). 5月 社団法人の組織をとる.

昭和28年(1953). 12月 '数学'第5巻第3号より'問題と解答'欄新設.

昭和29年(1954). 1月 岡潔'多変数函数論の研究'で朝日賞受賞.

5月 '数学'に雑纂(後に, 雑録, 記録と改称)欄新設.

6月 数学辞典を岩波書店より刊行.

8月 アムステルダムでの万国数学者会議において, 小平邦彦フィールズ賞受賞. 招待講演者は吉田耕作, 小平邦彦, 矢野健太郎.

昭和30年(1955). 7月 叢書 Publications of the Mathematical Society of Japan を創刊(Publicationの項参照).

9月 東京および日光において代数的整数論に関する

国際シンポジウム開催. 1953年の京都における国際理論物理学会につぐ戦後2度目の国際学会.

昭和31年(1956). 5月 '数学'第7巻第4号を上記シンポジウムの特集号とする. 特集号の最初である. またこの頃から'数学'に年会, 秋季総合分科会の講演プログラムを収録していたのを中止.

東洋紡社長谷口豊三郎氏寄金による数学研究振興会発足. 7月 第1回微分幾何学セミナーを赤倉東洋紡寮で開催.

12月 賛助会員募集. 前年9月の国際会議の報告 Proceedings of the International Symposium on Algebraic Number Theory 発刊.

昭和32年(1957). この年より受賞候補推薦委員会および国際交流委員会を設置.

7月 谷口資金により第2回シンポジウムとして代数幾何セミナーを赤倉東洋紡寮で開く. 以後毎年7月各分野で開かれた.

11月 小平邦彦, 学士院賞と文化勲章受章.

12月 '数学'第9巻第2号を'創立80周年記念特集号'とし, 簡単な年表[1]が載せられた.

昭和33年(1958). 1月 戸田宏, '位相幾何学におけるホモトピー論の研究'により朝日賞受賞.

8月 エジンバラで万国数学者会議. 招待講演者は永田雅直, 松坂輝久, 志村五郎.

10月 '数学'第10巻第1号に1957年の年会, 秋季総合分科会のプログラム掲載. これがプログラムが掲載された最後である.

昭和34年(1959). 4月 数理科学総合研究班発足.

数学第10巻第3号を前年秋に行われた'関孝和250年祭特集号'とする.

8月 応用力学連合講演会に再参加.

昭和35年(1960). 1月 岩沢健吉, '位相的方法を用いた整数論の研究'により朝日賞受賞.

2月 高木貞治(1875-1960)歿.

7月 数学第12巻よりノート欄新設. またこれまでの論説, 総合報告を一体として論説とする.

11月 岡潔, 文化勲章受章, 文化功労者となる.

昭和36年(1961). 加藤敏夫, '物理数学の近代解析的研究'で朝日賞受賞. 1月 '数学'第12巻第3号を高木貞治先生特集号とする.

11月 近藤基吉, '解析学の構成的基礎'により借成学術奨励金を受ける. 福原満洲雄, '微分方程式の研究'により学士院賞受賞. 第6回谷口シンポジウムとして, 堅田求是荘で多様体の微分幾何的な研究セミナーが開かれた.

昭和37年(1962). 岩沢健吉'群論及整数論研究'により学士院賞受賞.

8月 ストックホルムで万国数学者会議. 招待講演者は広中平祐, 井草準一, 伊藤清, 倉西正武, 鈴木通夫.

昭和38年(1963). 1月 松島与三, '連続群論の研究'により朝日賞受賞. 4月 全国共同利用研究所として京

都大学数理解析研究所設立。初代所長，福原満洲雄。

5月 谷口資金による代数幾何シンポジウムが堅田求是荘で，Lang, Mumford, 広中の参加で開かれた。

昭和39年(1964)。6月 吉田耕作他3名，‘解析的半群の理論および応用’により藤原賞受賞。

谷口資金による数学教育に関する日米研究集会を東京および堅田で開催・翌年報告集：Proceedings of the Preliminary Meeting in College Level Mathematics Education 発行。

昭和40年(1965)。5月 谷口資金による偏微分方程式シンポジウムが堅田で開催。Stone, Schwartz, Nirenberg 参加。

12月 ‘数学’第17巻3号を‘1965年度年会総合講演特集号’とする。主に来日外国人学者の講演である。

昭和41年(1966)。8月 モスクワで万国数学者会議。招待講演者は小野孝，志村五郎。次の開催地を日本でと申請したがニースにきまる。

溝畑茂，‘偏微分方程式の研究’により松永賞受賞。

9月 谷口資金による特別事業国際会議‘微分方程式と多様体’が求是荘で開催。Friedrichs, Phillips, Spencer, Kohn, Rossi, Baily, 小平，倉西参加。

10月 谷口資金による微分位相幾何シンポジウムが求是荘で開催，Thom 参加。

昭和42年(1967)。3月 ‘数学’第18巻第4号を‘日本数学会20周年記念特集号’とする。

3月 吉田耕作，‘近代解析の研究’により恩賜賞受賞。

4月 ‘数学’第19巻第1号を‘モスクワ・コンGRES 特集号’とする。

昭和43年(1968)。1月 広中平祐，‘代数多様体の特異点の解消’の研究により朝日賞受賞。

園正造，文化功労者となる。

4月 ‘数学辞典’改訂第2版発行。

昭和44年(1969)。1月 ‘数学’を各号64ページから80ページに増ページ。またこれ以後発行を暦年にあわせ，各巻1~4号1月，4月，7月，10月発行とする。

4月 東京，経団連会館において**函数解析学国際会議開催**。翌年1月発行の数学第22巻第1号を‘1969年函数解析学国際会議’特集号とする。また報告集Proceedings of the International Conference on Functional Analysis and related topicsが1970年に東大出版会から発行される。

4月 数学第1巻一第20巻の総目次・索引を臨時号として発行。

8月 第1回数学教育国際会議が，フランスリヨンで開催。秋月康夫出席。

11月 正田建次郎，文化勲章受章，文化功労者となる。

昭和45年(1970)。1月 佐藤幹夫・小松彦三郎，‘超函数の理論と応用の功績’により朝日賞受賞。

3月 谷口資金による，有限群と代数群セミナー，求是荘で開く。Tits, 鈴木参加。

5月 広中平祐，学士院賞受賞。

8月 ニースの万国数学者会議において広中平祐，Fields 賞受賞。招待講演者は16名におよぶ，加藤(敏)，鈴木(通)，伊原，竹崎，荒木(不)，岩沢，久保田，永見，渡辺(毅)，黒田，小林(昭)，倉西，志村，広中，伊藤。

11月 ‘数学’第22巻第4号を‘数理論理学日米合同セミナー記録’特集号とする。

永田雅宜，‘代数幾何学の研究’により松永賞受賞。

昭和46年(1971)。9月 京都にて‘常微分方程式および関数方程式に関する日米セミナー’開催。

昭和47年(1972)。7月 ‘数学’第24巻第3号より毎号96ページに増ページ。赤池弘次・中川東一郎‘ダイナミックシステムの統計的解析と制御法の確立’により石川賞受賞。

8月 京都にて‘第2回日ソ確率論シンポジウム’開催。

10月 谷口シンポジウムとして超函数論セミナーが求是荘で開催。Leray, Schapiro, 広中参加。

彌永昌吉の寄附による日本数学会賞(彌永賞)の制度が決定。春の学会で授賞と記念講演が行われることになる。

昭和48年(1973)。4月 伊原康隆，第1回彌永賞受賞。

4月 東京・経団連会館にて**多様体論国際会議**開催。10月発行の数学第25巻第4号を‘1973年多様体論国際会議’特集号とする。報告はManifolds-Tokyo, 1973 (Proceedings of the International Conference on Manifolds and related topics in Topology, Tokyo, 1973)として，1974年2月東大出版会から発行。

9月 岩波書店よりThe Collected Papers of Teiji Takagi 発行。

10月 位相数学分科会を函数解析，トポロジー両分科会に分離。

昭和49年(1974)。3月 鈴木通夫，‘有限群の研究’により学士院賞受賞。

4月 坂本礼子，第2回彌永賞受賞。

8月 バンクーバーで万国数学者会議開催，団体旅行により，日本からの出席者初めて100名を越える。招待講演者は井上政久1名のみ。前回提案されていた日本とフランスのグループ5への昇格決定。

彌永昌吉 ICMI(国際数学教育委員会)委員長に選出される。任期4年。

9月 谷口豊三郎の寄附により谷口国際シンポジウム計画委員会発足。第1回として北海道大学で有限群論国際シンポジウム開催，翌年4月発行の数学第27巻第2号をその特集号とする。

10月 数学第26巻第4号を‘数理論理学日米合同セミナー記録’および‘C\*環と物理学への応用日米セミナー記録’特集号とする。

11月 東京・国立教育研究所にて，日本数学教育学会主催，数学教育に関する国際会議開催。

昭和50年(1975)。1月 数学第27巻第1号をバンクーバー・コンGRES 特集号とする。

4月 高橋元男, 第3回彌永賞受賞.  
 5月 学会本部を東京都文京区本駒込2-28-21, 東洋文庫内に移転.  
 11月 広中平祐, 文化勲章受章, 文化功勞者となる.  
 昭和51年(1976). 3月 京都大学数理解析研究所にて, 代数的整数論国際会議(第2回谷口国際シンポジウム)開催.  
 4月 加藤十吉, 第4回彌永賞受賞.  
 6月 佐藤幹夫, 学士院賞受賞. 小平邦彦, '複素多様体の理論'の研究で藤原賞受賞.  
 9月 東京および京都にて, 関数解析・数値解析日仏セミナー開催.  
 昭和52年(1977). 1月 京都大学にて第3回谷口国際シンポジウム(代数幾何学)開催.  
 4月 河合隆裕, 第5回彌永賞受賞.  
 8月 第4回谷口国際シンポジウム(確率論)堅田求是荘にて開催.

10月 東京数学会社創立100周年記念行事を日本物理学会と共同で開催(本号参照).  
 12月 名簿を初めてコンピューター処理で製作.

この年表は学会の記録のほか, とくに下記の資料を中心に一松信がまとめたものに小松醇郎が補筆した. [1], [2]と重複が多いが, 全体を通ず意味でお許しを乞う次第である. 文中敬称はすべて省略した.

- [1] 年表, 創立80周年記念号, 数学9, 2号(1957), 7-10.
- [2] 年表, 日本数学会20周年記念号, 数学18, 4号(1967), 14-15.
- [3] 年表, 1877~1957, Butsuri 32, 10号(1977), 888-894.
- [4] 中村清二, 日本数学物理学会創立五十周年記念大会に於ける演説, 日本数学物理学会誌2(1928/29).

資 料

創立以来の代表者名, 会員数の変遷, 年会の会場

	代表者名	会員数 特記せぬ 限り3月 31日現在	年会会場 1887年以后			
1877(明10)	{神田孝平 <sup>a</sup> 柳 檜悦	55 <sup>f</sup>		1896(明29)	寺尾 寿	126 <sup>h</sup> 東大
1878(明11)	{神田孝平 岡本則録			1897(明30)	菊池大麓	小石川植物園
1879(明12)	{神田孝平 岡本則録			1898(明31)	田中館愛橋	東大
1880(明13)	柳 檜悦			1899(明32)	長岡半太郎	東大
1881(明14)	柳 檜悦			1900(明33)	田中館愛橋	169 <sup>h</sup> 東大
1882(明15)	(社長廃止)			1901(明34)	長岡半太郎	東大
1883(明16)	(社長廃止)			1902(明35)	大森房吉	187 <sup>i</sup> 東大
1884(明17)	村岡範為 <sup>馳b</sup>			1903(明36)	藤沢利喜太郎	東大
1885(明18)	山川健次郎			1904(明37)	田中館愛橋	214 <sup>j</sup> 東大
1886(明19)	菊池大麓			1905(明38)	長岡半太郎	224 <sup>i</sup> 東大
1887(明20)	山川健次郎	1906(明39)	田中館愛橋	東大		
1888(明21)	菊池大麓	1907(明40)	長岡半太郎	東大		
1889(明22)	山川健次郎	1908(明41)	田中館愛橋	東大		
1890(明23)	菊池大麓	1909(明42)	長岡半太郎	298 東大		
1891(明24)	寺尾 寿	1910(明43)	田丸卓郎	319 東大		
1892(明25)	藤沢利喜太郎	1911(明44)	田中館愛橋	341 東大		
1893(明26)	菊池大麓	1912(明45)	高木貞治	350 東大		
1894(明27)	田中館愛橋	1913(大2)	長岡半太郎	358 東大		
1895(明28)	山川健次郎	1914(大3)	中村清二	380 東大		
		1915(大4)	吉江琢兒	391 東大		
		1916(大5)	田丸卓郎	407 東大		
		1917(大6)	平山 信	414 東大		
		1918(大7)	長岡半太郎	438 東大		
		1919(大8)	高木貞治	453 東大		
		1920(大9)	中村清二	492 東大		
		1921(大10)	吉江琢兒	529 東大		
			富士見軒			
			富士見軒			
			東大 <sup>r</sup>			
			精養軒			
			天文台			
			帝国ホテル			
			東大			
			東大			



1922(大11)	中川銓吉	578 <sup>k</sup>	東大
1923(大12)	佐野静雄	623 <sup>l</sup>	東大
1924(大13)	高木貞治	648	東大
1925(大14)	末広恭二	705	東大
1926(大15)	寺沢寛一	742	東大
1927(昭2)	中村清二	754	東大
1928(昭3)	中村清二	789	東大
1929(昭4)	吉江琢兒	903	東北大 <sup>s</sup>
1930(昭5)	高木貞治	966	東大
1931(昭6)	高木貞治	1041	京大
1932(昭7)	平山清二	1128	東大
1933(昭8)	寺沢寛一	1190	東北大
1934(昭9)	竹内端三	1244	東大
1935(昭10)	西川正治	1336	阪大
1936(昭11)	掛谷宗一	1406	東大
1937(昭12)	藤原咲平	1457	北大
1938(昭13)	吉江琢兒	1552	東大
1939(昭14)	寺沢寛一	1574	京大
1940(昭15)	西川正治	1644	東教育大 <sup>t</sup>
1941(昭16)	掛谷宗一	1816	広島大 <sup>u</sup>
1942(昭17)	西川正治 <sup>c</sup>	2257	東大
1943(昭18)	清水武雄		東北大
1944(昭19)	萩原雄祐		
1945(昭20)	清水武雄	2580 <sup>m</sup>	
1946(昭21)	正田建次郎 <sup>d</sup>	751 <sup>n</sup>	東大・東大 <sup>v</sup>
1947(昭22)	辻正次	1015 <sup>p*</sup>	東大・東大
1948(昭23)	窪田忠彦	1400	東大・京大
1949(昭24)	末綱恕一	1193	東大・ 〔京大〕 〔奈良女大〕
1950(昭25)	彌永昌吉	1132	東大・京大
1951(昭26)	福原満洲雄	1121	東大・京大
1952(昭27)	彌永昌吉	1210	東大・京大
1953(昭28)	彌永昌吉 <sup>e</sup>	1232 <sup>q</sup>	東大・〔京大〕 〔山口大〕
1954(昭29)	福原満洲雄	1365 <sup>q</sup>	東大・京大
1955(昭30)	福原満洲雄	1412 <sup>q</sup>	東大・京大
1956(昭31)	彌永昌吉	1460	東教育大・ 京大
1957(昭32)	吉田耕作	1527	京大・東工大
1958(昭33)	彌永昌吉	1585	東大・京大
1959(昭34)	吉田耕作	1609	〔東教育大〕 〔御茶水大〕 京大
1960(昭35)	福原満洲雄	1648	東大・京大
1961(昭36)	彌永昌吉	1729	日大・京大
1962(昭37)	吉田耕作	1820	東大・名大
1963(昭38)	彌永昌吉	1904	京大・ 東大駒場
1964(昭39)	吉田耕作	2019	早大・九大

1965(昭40)	吉田耕作	2157	京大・ 東教育大
1966(昭41)	河田敬義	2277	京大・東大
1967(昭42)	吉田耕作	2349 <sup>q</sup>	都立大・ 広島大
1968(昭43)	河田敬義	2582	京大・早大
1969(昭44)	彌永昌吉	2708	京大・東大
1970(昭45)	彌永昌吉	2827	学習院・ 静岡大浜松
1971(昭46)	福原満洲雄	3000	都立大・京大
1972(昭47)	吉田耕作	3202	慶応日吉・ 京大
1973(昭48)	古屋茂	3318	立大・岡山大
1974(昭49)	古屋茂	3530	東大・京大
1975(昭50)	田村一郎	3693	阪大・ 東大駒場
1976(昭51)	田村一郎	3841	九大・東工大
1977(昭52)	木村俊房	3905	京大・理大 (神楽坂)

## 註

- a 「総代」後に「社長」と改称し、1881年まで続く。  
b 「事務委員長」、以後1941年まで。  
c 「理事長」、以後1945年まで。  
d 日本数学会「委員長」、以後1952年まで。  
e 以後「理事長」。  
f 「社則によって入社金を納れ常員となるもの」の数。なお11月現在で「初会より出席の順序を以て入社人名を記すること左の如し」として114名があげられている。  
g 東京数学物理学会会員人名録(10月改)による。なお、東京数学会社社員録(1月)によれば、常員64名、別員13名。  
h 名簿(6月現在)による。  
i 名簿(7月現在)による。  
j 5月現在(?)  
k 579(?)  
l 627(?)  
m 12月、解散時。  
n 6月、日本数学会設立時の会員数。  
p 名簿による。  
q 4月1日現在。  
r この頃「東京大学」。その後「帝国大学(理科大学)」、「東京帝国大学」などの名の時期もあるが、これに統一する。  
s 「東北帝国大学」だが、現在の略称を用いる。他の大学についても同様。  
t 当時「東京文理大」。  
u 当時「広島文理大」。  
v この年より春秋2回となる。  
\* 数学9(1957)、74頁所載の数字は、1947~53の部分と、1956、57の部分が、正しくない。  
なお、空欄の部分は未調査。

(編集部)